

重度下腿外傷の1年後患者立脚型評価

患肢温存群と切断群の比較：前向きコホート研究

目的

この単施設前向きコホート研究は、受傷後1年時での患者立脚型評価による転帰を患肢温存群と切断群で比較し、切断術が機能と日常生活動作の早期回復に寄与するかどうかを明らかにすることを目的とした。

方法

重症下肢開放骨折患者45例47肢を対象とし、患肢温存群と切断群に分類した。受傷1年後の患者立脚型評価は、当センターで登録した日本骨折治療学会整形外科外傷データベース(DOTJ)より入手した。患肢の早期回復は、LEFSとShort-Form 8の機能性と日常生活動作質問票を用いて評価した。

結果

47肢のうち、34人34肢が患肢温存され、11人13肢が切断された。LEFS（平均：49.5 vs. 33.1、 $P=0.025$ ）、Short-Form 8のmental health component（平均：48.7 vs. 38.7、 $P=0.003$ ）、role - physical component（平均：42.2 vs. 33.3、 $P=0.026$ ）、mental component summary（平均：48.2 vs. 41.3、 $P=0.042$ ）において、患肢温存群と切断群の間に有意差が認められた。患肢温存群の方が切断群よりも予後が良かった。

結論

再建技術が進歩し患肢温存が可能になった現在、研究の焦点は「患者がどう感じるか」という視点に基づくべきである。したがって、患者立脚型評価に基づく本研究の結果は有意義であると考えられる。